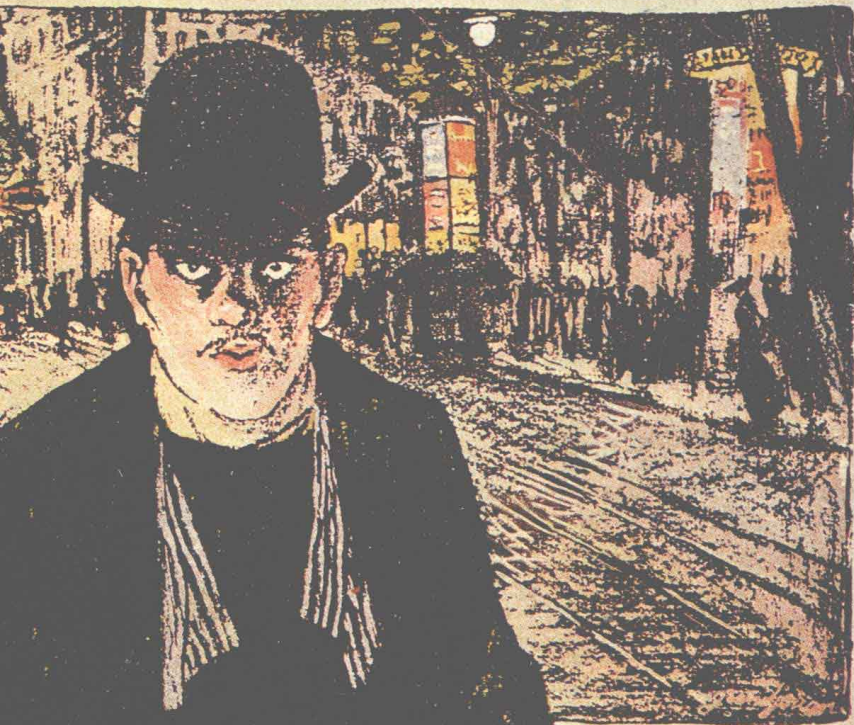


HARLES-LOUIS-PHILIPPE



ビュビュ・ド・モンパルナス

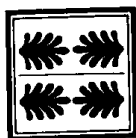
朝のコント

フィリップ 堀口大学訳

BUBU
-DE-
MONTPARNA



堀口大学〈訳者〉1892年東京生まれ。詩人・
仏文学者。著書、詩集「月光とピエロ」「人間の
歌」。訳著、訳詩集「月下の一群」ボードレー
ル「悪の華」他。芸術員会員、文化功労者。



講談社文庫

ビュビュ・ド・モンパルナス 朝のコント
フィリップ 堀口大学訳

昭和47年3月15日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 3930

製 版 株式会社まゆら美研

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 有限会社中沢製本

© Daigaku Horiguchi 1972

Printed in Japan

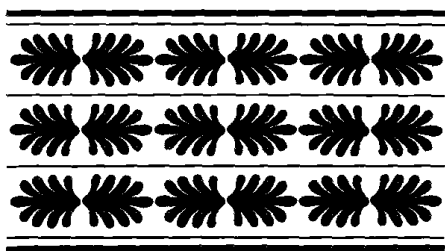
定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

生文庫

ビュビュ・ド・モンパルナス 朝のコント

フィリップ 堀口大学訳



講談社

目次

朝のコント		一三三	
ティンネットの脚	一三五	遺言状	二二〇
バタの中の猫	一四三	恋の一頁	二二七
ロメオとジュリエット	一五〇	娘の嫉妬	二三三
仔犬	一五八	酔漢	二三九
二人のならずもの	一六六	告白	二四五
めぐりあい	一七三	来訪者	二五一
来訪	一七九	殺人犯	二五八
獅子狩	一八六	ティエンヌ	二六五
食人種の話	一九三	エスケープ	二七一
マツチ	二〇〇	單純な人たち	二七七
慈善	二〇六	友の仲	二八四
悪魔の敗北	二二三	三人の死刑囚	二九一

年 解	堀口大学
譜 説	二九八
.....	三〇

ビ
ユ
ビ
ユ
・
ド
・
モ
ン
パ
ル
ナ
ス

第一部

第一章

セバストポール広小路は、七月十四日祭の翌日になつても、まだ活気づいていた。宵の九時半。アーク燈の列が、並木の間に混つて鋭い白光で、あたりの闇を切つたり、葉のかげに隠れたりしている。どの店もみんな閉まつている。ピグマリオンも、プチ・ザニョーも、クール・バターヴも、メーユール・マルシエ・デュ・モンドも一列だ。大きな黒い建物の地階に並ぶこれらの店舗の、つい先がたまで歩道を明^{あか}かと照していた灯を消した正面は、今ではかえつて歩道を暗くしているように見える。二階三階、もっと上の階のバルコニーにまで出ていて昼間の太陽に輝いていた大きな金看板も、今では黄色い木型としか見えない文字を、闇に消されて、夜が来たので、卸問屋同様に休息しているように見える。帽子飾りの造花や鳥の羽根を売る店も、譲り店舗の仲介業も、食料品店も、服地屋も、どれも鎧戸をおろして沈黙している。こんなセバストポール広小路だった。

道行く人たちが、もうショー・ウィンドーを覗いたりしない時刻になつていた。今や、夜の生

活が別の目標を持つて始まっていた。乗物は燈火^{あかり}をつけている。辻馬車は歡樂の二つの目のような明るい灯をともし、行き交う電車は赤や青の信号燈をかがげ、行く先を急ぐ群衆のように唸りをたてている。色々な乗物が後から後から続いたり、行きちがつたり、足踏みしたり、走りだしたりしている。遠くグラン・ブールヴァールの方では、空は一層明るく、天まで続いて、何やら明るい気持で活気づいているようだ。目的は、商店が全部しまっているここセバストポール広小路にはない。乗物は走りつづけている。グラン・ブールヴァールに向つて走る乗物は、光に向つて行くわけだ。それかあらぬか何かある見世物にひきつけられる人たちのように急ぎ足だ。

セバストポール広小路は、すべて歩道の上で生きている。夏の夜の青ずんだ空氣の中の広い歩道の上を、七月十四日祭の翌日の今夜、パリが祭の名残を引きずつて通る。アーク燈の光、木々の広葉、行き交う車馬、道行く人たちの心おどり、すべてこれらのものが一緒になつて、アルコールと疲労の生活のような一種とげとげしくて鈍重な気持を作り出している。これは毎晩みられるありふれた光景ながら、今夜はそれ以外に、その街角この家の前に、昨日のダンスの思ひ出が残っている。きこえて来る物音や叫び声の中に、酔漢たちの放歌を思い出させるものがある。窓に出し放しになつてゐる提燈や国旗の中には、今もつて歡樂の続きを要求しているとかか思えないようなものもある。人たちがころころに考へていることも、大方さっしがつく。昨日存分に楽しんだ連中は、もう一度味うことの出来るような楽しみが来てはくれないものかと思つて見張っている。これというのも、一度味をしめると、人間は永久にそれを思い出すものだからだ。金がなかつたり醜かつたり臆病だつたりする他の連中は、お祭のほとぼりの中を、その辺の

隅っこに自分たちのために残された切れっ端でも落ちていないかと、うろつき廻っているわけだ。歡樂を味わわずにしまった人間は悲しいので、疲れてへとへとになるまで、毎日それを探しまわらずにはいられないものだ。

空氣がこの人々をとりまいてぎわめいているように見える。身装みなりのいい若者が、二人または三人ずつ組になって来かかりそして往きかかる。彼等のカラーは新しく、渋くて上品なネクタイには、ダイヤのピンがさしてある。金でポケットをふくらませて、彼らは明るい方へと急ぐ。商店勤めの使用人たちが、お互いに手柄話に忙がしい、《夜中すぎまで踊り抜いたものさ、おいら。言いなり放題のおとなしい娘むすめなんだそれが。後でカンカンポア街のホテルへ連れ込んだものよ。娘さん大した氣の入れようさ！》二人連れの男が、二人の可愛らしい女の後あとをつけて行く、男たちに言葉をかけられると、女たちは忍び笑いをしながら、お互いに顔を見合わす。若者たちは、アベックの一组が通ると、火をふくような目つきで、女をじつとみつめる。でっぶり肥った男たちは、満足気に葉巻をくゆらせながら、思っている、《わしは年俸一万二千フランの高等官だぞ。》幾組となく男と女が連れだつて通りすぎる。今そこへやって来たのは、粹な若者に腕をとられた小粋な若夫人だ。彼女には自分の金持らしい様子がやたらに嬉しい、彼氏の方は他人ひとから羨望されるのが嬉しくて有頂天だ。つづいて現われたのは身装みなりの大して立派でない若い娘さんだ、濡れごとを考えながら、しきりに何か言っている愛人に寄りそって歩いて行く。最後に来たのは幾組かの夫婦だ、彼らはてんでに勝手な方を眺めたり、時々口をききあったりしている、それというのも彼らが、お互いに身も心もすっかり馴れ切っているからだ。

彼らは行く。一団が行ってしまうと別の一団がまた現われる。商人たちはまるで自分たちの店舗の間口ほども街上に場所を占めて歩いている。一人の若者が女の腕をしつかり握ってペコペコしながらついて行く。世界の果までも追いかけて行きそうな勢が感じられる。光の中を虚栄と、上機嫌と情慾が、泳ぎまわっていた。おかげで空気までが熱かった。昨夜の疲れなんか何でもなくなっていた！ 乱痴気騒ぎの思い出が、熱い息吹になって流れていた、そして人たちの心臓は、慾情に痙攣^{けいれん}けた。パリは牝犬のあとを追いかけて何処までも走りつづける疲れた牡犬さながらだった。

売笑婦たちは、仕事に忙がしかった。そこへ来たガブリエルは、コンスタンス殺しのロベールと二年も同棲した女だ。彼女の情夫はついこの間懲役に行つたばかりだ。そこにいるジャンヌは、十七にもなっただろうか。先月から、彼女はセバストポール広小路をうろつくようになった。顔の白粉もまだ薄く目はまだもの珍しい歓楽に輝いている。大抵の男たちは、彼女を玄人^{くろうと}だとは思わない。被りもののない売笑婦が来たかと思うと、今度は大げさな帽子を被ったのがやって来る。ある者は牝牛のように足どりも不恰好で、ずうずうしく男たちに言い寄る。またある者は体をくねらせたり、品を作ったり、秋波^{あきなみ}を使ったり、含み笑いをみせたりする。ランビュト街の角には、彼女たちの一群が出来上った。彼女たちはみんな一度にしゃべりたてる。左手に、はじめじめした中央市場が見えている。人は思わず捨てられたキャベツの屑の山を思い出したりする。沼べりで騒ぎ立てている蛙どもと言うところ。

風紀係の刑事は、二人連れでやって来る。この連中を見分けるのは造作^{ぞうさ}もない。目つきを、汚

れた身装^{みなり}を、むつつりした歩みぶりをみれば知れる。彼らは不潔だ、彼らの職業同様に。彼らはぎこちなく歩いているが、これは何か役目を果しているものの常だ。突き刺さるような目つきで、彼らは女たちを、頭のとっぺんから足の爪先まで眺めまわす。通行人の視線はものを見るだけだが、風紀係の刑事たちのそれは、監視する目つきだ。戦功賞を胸につけた肥っちょの栗いろ髪^{かみ}の男が、両の拳をふりながら歩いて来る。売笑婦たちは、きまりわる氣に、振向きもせず、通りすぎる、長い物には巻かれよという奴隷根性を心に抱いて。

てき屋の客寄せの口上。巡查が一人通りすぎると、後に一人てき屋が現われるという具合だ。言いかわしたように、鳥打帽を被り、景氣づいた顔に不景氣な口ひげをはやして、彼らは盛んにまくしたてる、何しろ一応の飲み食いのしろを儲けるのに一所懸命だ。まだ十八にはなっていないと思われるこの一人は、鳥打を深々と耳まで被り、足にびったりした長靴を、これ見よがしに持上げながら、物見高い人たちの輪の周りを歩いている。彼は怪しげなすかし絵のアルバムを、一冊十文で売るのが手品師の身振よろしくこれを見物人の目の前にちらつかせる。《さあ、さあ、お立会の衆、帽子にパリの町の紋章^{もんじやう}をつけた奴が近づいて来ると見たら、どうか知らせて頂きたい。こちらにも色々手筈の仕方がありますので》警察は、てき屋たちを売笑婦同様に追いまわすが、これが大たい、彼女たちの情夫^{まふ}というわけだ。

ピエール・アルディは、一日事務所で働いた後で、今しもセバストポール広小路の人混みに混って歩いていた。六カ月前にパリへ来たばかりのこの二十歳の若者は、こうしたパリの景物の

間を落着かない気持で歩いてゐた。行き交う車馬、目に痛い燈火、街上の人出、淫蕩の氣、騒々しい雑音が混り合つて、バベルの塔の混乱を作り出して人を脅かし、人にあまりにも多くのことを一度に思わせる。どの田舎者もみんな一度はこの窮屈な氣持を味い、これに對してとまどいたり侘しい思いをしたりしたものなのだ。村のダンス場で羽振をきかせた天晴れな若衆たちも、グラン・ブルーヴァールへ連れ出されると、とんと氣勢が上らなくなる。

歩いている一人の男の頭の中には、一生の思い出が詰め込まれていて、それがいそいそと活気づいている。ある一つの光景がそれ呼び覚し、別の一つの光景がそれを刺戟する。われらの肉体はあらゆる思い出を宿している、われらはそれを自分たちの慾望とない合せる。われらは現在という時の流れの中を、思い出を詰めこんだ旅カバンを手に、何処までも歩きつづける、つまりわれらは現在も今夜もどの瞬間にも完全に自分自身というわけだ。

今夜ピエール・アルデイが歩きながら考えるのは、まず次ぎのようなことだった。

東部のとある小さな町の一軒の家、そこに彼の両親が材木商をして暮している、ピエール・アルデイは、そこへ思いを馳せるのが好きだった、何しろまだ二十歳という若さだし、パリへはこの一月に出て来たばかりという新米だったので。その家は町はずれの小高い所にあつて庭をめぐらしていた。夏の夕はわけても氣持がよかつた。木蔭には涼しい微風がそよいだ。夜になると皆は庭へ出て涼んだ。氣懸りなのは空の星くらいなものだ、稲びかり、あれは《暑氣のせいだ》、こうして若者は家族の者と一緒にいて最初のシガレットになじんでいく。生活の細部までがすべて楽しい。あまり暑すぎる晩には、スープの代りに、牛乳を飲む。これはあなたの心の底まで

さっぱりさせてくれる清涼飲料だ。時折、すでに嫁いだ姉が、小さな娘を連れて、一週間ほど宿りがけで来る。幾分御馳走が余計に出来、幾らかみんなが余分に陽気になる。妹は小さな姪のジュリエットのママンになったつもりで遊んでいる。彼はこの姪を散歩に連れ出してお菓子を買ってやったりする。何の不自由もなかった。この家族の全員がそれぞれに自分たちが幸福な大自然の中に在って、一つの単位を形作っていると感じていた。

彼はまた、実業学校で過した自分の三年間を思い起した。彼は、複雑な線の橋梁や機械の図を引いたり、はつきりとよく融け合った色調の水彩画を描いたりすることを覚えた。彼の両親は、自分たちの寝室に、二つの丘の間に見える駅を表わした、見事なデッサンを額に収めてかけさせた。彼は二番で卒業し、証書と七宝のメダルを貰った。

彼は月給百五十フランの図工として、ある鉄道会社へ就職が出来た。実業学校の先生たちのすめに従って、美術工芸学校へ進まなかったことを、彼は後悔した。両親がこの犠牲を受け入れてくれさえしたら、彼はじきに課長くらいには成れたかもしれないのだ。

アーク燈の火屋が一直線に続くここセバストポール広小路を、彼は幾千という通行人に混って歩いていた。光は木の葉をまれ枝の間の影をくぐって、歩道へ落ちていた。彼にはこの光が、一そう輝かしく、この群衆が一そう無数に感じられた。十万人の人に混ると、ぼっと出の若い田舎者は迷い子になった思いがするのが常だ。彼は誰一人知り人がなかった。そして何時までも歩きつづけた。新しい通行人が通りすぎて行った、みんな同じような様子で、無関心な顔つきで、彼を見ようとさえもしなかった。彼らのたてるもの音は、自分にかかわりのない民衆から出るよう

に、彼の周囲に聞えた。彼らは彼に動いたり身振をしたりするだけの集団としか見えなかった。ただその集団は彼が行きずりに耳にした笑いの破片のように陽気であり、彼が見た女の視線のよう陽気なだけのことだった。

彼は沈没しまいがために、何物かにすがろうと試みた。彼は自分の内心に降りて行って、そこに何らかの喜びを見出す必要があった。この全般的な陽気さに巻き込まれずにすませるがためには、この周囲に対抗するがためには。彼は押し寄せて来る上潮うしほに向って、堤防をきずいて、叫んでやりたかった、《僕だって存在してるんだぞ。砂利とセメントと一緒に僕は立上る、そして君たちがわめきたてるなら、僕がせき止めてみせるぞ。》

彼は、ラルブル・セック街の、とある家具付安宿の六階の部屋で暮していた。こうした宿屋の部屋というものは、何処だってみんな不潔だ、理由はあまりにも多くの止宿人が、そこで生活したからだ。ベッド、鏡付服箆、二脚の椅子と足に車のついたテーブルとが、そこを満たしている。いかにも狭いので、これら四つの家具で一杯のように見える。ここで人は生きる、月々二十五フランずつ払って、なさない生活を。ベッドの蒲団は汚れている。窓のカーテンは灰色だ、貧乏暮らしの一日のように。宿のボーイは、合鍵を持っていて、何時なんどきでも、あなたの部屋へ入ることが出来る。隣り附合いは半月毎に替り、部屋の仕きり越しに、彼らの生活があなたに聞きとれる。ある者は、アル中の夫婦でやたら喧嘩ばかりしている、ある者には淫売の匂いがする、たまにまともな人間がいるかと思えば、信頼を感じさせない連中だ。このような家具付安宿の可哀想な住人たちには、くつろぐわが家というものはあり得ない。ピエール・アルデイには言

う資格がなかった、《僕には淋しい時に、自分の愛する物にとり囲まれて、どっかりと腰をおろす避難所があるんだ。》と。

彼の唯一の避難所は、入社早々結ばれた友、ルイ・ビュイツソンだけだった。ルイ・ビュイツソンは、二十五歳だった、図工としてピエール・アルデイと同じ課で働いていた。これは一メートル五十三しかない小男だった。身長が足りないのです、徴兵検査には不合格になった。このため彼は同僚たちに尊敬されなかった。彼らは彼を、善良な青年だとは思っていたが、どのみち身長の一メートル五十三の重要さしかないものとして扱った。高等工芸学校の入試を受けたことのある彼は、数学ならうんと勉強したことがあった。これが彼に分析の習慣を与えた、また二十歳まで田舎の中学に寄宿生として在学したので、これが彼に、困苦に耐える習慣を与えた。美しい未来の夢が損われたので、彼は謙遜家になった。彼はこう思っていた、僕は月給百八十フラン貰っている。僕は平民並みの人間だ、自分のパンを儲けるために働いている。晚には、散歩して若い女たちを街で眺めたあと、文学と哲学の勉強をする。彼は言っていたものだ、《あの女たちは光る物を、金のある若者たちを、美貌の若者たちを、追いかけてまわしている。金のある若者たちは彼女たちを贅沢に慣らし、美貌の若者たちは彼女たちを裏切って、恋愛とは単なる快樂の一つにしかすぎないと教える。年をとってから、彼女たちは僕らの所へ戻って来る。彼女たちは、衣裳や物見遊山の費用で僕らを破産させるが、僕らの恋人となり伴侶となるには、すでに熱意を欠いている。僕は一人の若い女中さんと文通している。理由は彼女が単純で働き手だからだ。いずれ二人は、夫婦になる筈だ。僕は平民並みの妻と一緒に平民並みの男として暮したいのだ。僕は僕